©日本カムリ学会 2008
Cylchlythyr 12:5-8

研究紹介　*Rhif 12*

Gwenllian. M. Awbery (1984). 'Phonotactic constraints in Welsh'. ***Welsh Phonology***. (Martin Ball. & Glyn. E. Jones. (eds.). Cardiff: University of Wales Press). 65-104.

小池　剛史

カムライグ語の単語の発音が分からないという思いをされたことはないだろうか？例えば、llyfr「本」の発音は「シブル」それとも「サブル」だろうか？こんな時には辞書を引けばよいのだが、現在出版されているカムライグ語辞書には、私の知る限りでは、単語の発音は載せていない。これには、カムライグ語の綴字法を知っていれば綴りから発音がある程度予測出来るという事情があるかと思う。比較的最近の辞書である ***Pocket Modern Welsh Dictionary*** (Gareth King. 2000. Oxford University Press)でも、巻頭で綴りと発音の規則をまとめており、その冒頭で 'Welsh spelling is largely phonetic' (xiii)と述べている。しかし、綴りと発音は、書き言葉と話し言葉という二つの異なる言語媒体に属するものであり、綴り字が発音を１００％忠実に反映することはない。例えば上掲の辞書では、綴り字<a><â>の発音を、'**a** as in Welsh English　m*a*n (i.e. slightly more open than in English　m*a*n)'；'**â** longer version of **a**' (xiii)と説明しており、これを読むと<a>は短母音の[a]（ア）、<â>は長母音[aː]（アー）を表すかのように思ってしまう。<â>が常に長母音を表すということに間違いはない（例 t*â*n/taːn/（ターン）「火」）が、<a>は、長・短母音の両方を表しうる（例 t*a*d /taːd/（タード）「父」）；m*a*m /mam/（マム）「母」）。<a>を長短いずれの母音で発音するかという判断は、カムライグ語母語者の持つ言語直感に求められる。この直感を持たない我々は、母語者の発音に見られるパターン（規則）を見出し、その規則に従って何度も発音練習をし、母語者の直感を自分のものにしなくてはならない。その規則とは、後で見るように、例えば短母音、長母音はその後にどのような音が来る時に現れるかといったものである。音の配列、つまり音素配列論（phonotactics）に関わる規則である。ここで紹介する Awbery (1984)の論文は、カムライグ語の音素配列論を概説したものである。

Awbery はカムライグ語の音素を単純母音、子音、二重母音に分類している。また方言差にも言及しており、最初に南部方言に見られる音素配列を述べた後、北部方言、ペンブローク州方言などにおける音素配列との違いも明確に説明している。ここでは、主に南部方言における、単純母音と子音の音素配列規則のいくつかを紹介する。

カムライグ語の単純母音は、大きく長母音・短母音に分類出来る。

©日本カムリ学会 2008
Cylchlythyr 12:5-8

長母音：**aː iː uː eː oː** (ɨː)（アー、イー、ウー、エー、オー、（イー））
短母音：**a ɪ ʊ ɛ ɔ ə** (ɨ)（ア、イ、ウ、エ、オ、ァ、（イ））

（短母音/ʊ /は Awbery は ɷ の記号を使用しているが、ここでは ʊ で表す。括弧内の ɨː,ɨ は北部方言に見られる中舌半狭母音である。

母音の長短を決定するのは、まず**(1)強勢の有無**である。無強勢音節内の母音は、常に短い。カムライグ語では末尾第二音節に強勢が置かれることが多く、その場合は最後の音節内の母音は無強勢となるので母音は短くなる（例 cal*o*n/kalɔn/[1]（カロン）「心」）。また、単音節語の冠詞 *y* /ə/, *y*r/ər/や前置詞、不変化詞の *y*n/ən/などは一般的には強勢が置かれないので、短母音である。次に重要なのは、**(2)母音に後続する音の種類**である。**(a)** 鳴音（sonorants；鼻音 /n/や流音 /r, l/）の前の母音は、長短いずれも可能である（d*y*n /diːn/。（ディーン）「男」; gw*i*n /gwɪn/（グウィン）「白」）。同じ鼻音でも、/m,ŋ/の前では短母音の場合が多い（c*w*m /kʊm/（クゥム）「谷」; ll*o*ng /łɔŋ/（ソング）「船」: b*û*m /biːm/（ビーム）「（私は）～だった」（bod の直説法過去一人称単数形）は例外的）。**(b)**母音の後に、有声閉鎖音/b, d, g/、無声摩擦音/f, θ, s, ł, ʃ, χ, h/が後続する場合には、長母音になる（b*y*d /biːd/（ビード）「世界」; b*a*ch /baːχ/（バーハ）「小さな」）。**(c)**その母音の後に何も続かない場合にも、長母音となる（c*i* /kiː/（キー）「犬」）。**(d)**母音の後に、無声閉鎖音 /p, t, k/、または子音群（どのような子音の組み合わせであるかは問わない）が続く場合には、短母音になる（c*o*t /kɔt/（コット）「コート」; pl*a*nt /plant/（プラント）「子供たち」）。(a)(b)(c)(d)の規則は、二音節以上から成る語の場合も同様である（ただし下の**(3)**を参照）。例えば、上で bach「小さい」の<a>は長母音であったが、bachgen「男の子」の<a>は、その後に子音連続があるため、短母音となる（/'baχgen/（バハゲン））。従って、「小さな男の子」bachgen bach は /"baχgen "baːχ/（バハゲンバーハ）となる。ただし、注意すべきは **(3)その母音を含む音節の語の中の位置である。**単音節語では /s, ł/（無声摩擦音）の前の母音は長母音であるが、多音節語の強勢音節内では、/s, ł/の前では短母音となってしまう。従って、c*a*s /kaːs/（カース）「嫌い」や ll*a*ll /łaːł/（サース）「もう一つの」の<a>は長母音だが、c*a*seg /'kaseg/（カセグ）「雌馬」や allan /'ałan/（アサン）「外へ・に」の<a>は短母音である。

しばしば曖昧母音と呼ばれる短母音/ə/（ァ）には、これに対応する長母音が存在しない。この音は<y>で綴られるが、この母音は上の**(1)(2)(3)**の条件に関わ

---

[1] 無強勢音節内の母音に対して、Awbery は長母音に用いる音声記号 **aː iː uː eː oː** を長音記号(ː)なしで表記している。これは、カムライグ語の無強勢音節内の母音は、音質的には長母音と同じく、音量的には短く発音するという意味であろうか？この研究紹介での表記は、すべて Awbery のものに従う。

©日本カムリ学会 2008

らず常に短母音である。重要なのは、/ə/は最終音節内には決して現れないということである。従ってこの母音は単音節語には現れない。単音節語で<y>の綴りが現れる場合には/iː/または/ɪ/（北部方言では/ɨː/または/ɨ/）を表す（例 b*y*s /biːs/（ビース）「指」）。多音節語の最終音節に<y>の綴りが現れる場合も同様である（m*y*n*y*dd /'mənið/（マニズ）「山」: 最初の<y>は/ə/（ァ）を、二つ目の<y>は/i/（イ）を表す）。

次に子音の音素配列である。子音は、大きく阻害音と鳴音に分類されている。鳴音は、調音中に常に声帯が振動しており、比較的聞こえやすい音である。阻害音は、口腔内の狭めを伴う音で、声帯の振動を伴ったり伴わなかったりする（つまり有声無声の対立がある）。狭めのために、聞こえ度が鳴音よりも低い。

阻害音（obstruents）: 閉鎖音・無声/p, t, k/　有声 /b, d, g/
摩擦音・無声/f, θ, s, ɬ, ʃ, χ, h/
有声/v, ð/

鳴音（sonorants）　鼻音 /m, n, ŋ/
流音 /r, l/

子音の音素配列で興味深いのが、子音連続の仕方である。音節の構造は、もっとも聞こえ度が高い母音が中心にあり、その前後に子音が置かれるのだが、その子音が子音連続から成る時には、外側には鳴音、内側には阻害音が置かれ、音節初め⇒中心⇒音節終りに向かって、鳴音⇒阻害音⇒母音⇒阻害音⇒鳴音となって、聞こえ度で見ると、低⇒高⇒低という山を形成するようになる。例えば、*dr*ud/driːd/（ドリード）「（値段が）高い」では音節の最初が阻＋鳴であり、hardd /harð/（ハルズ）「きれいな」では音節の終りが鳴＋阻である。plant/plant/（既出）では、音節の最初が阻＋鳴、終りが鳴＋阻である。子音連続を含む音節はこのように聞こえ度で低高低の山を成す形になることが一般的である。子音連続が同じ種類の子音から成る場合（阻＋阻や鳴＋鳴）もある（*sb*ectol /'sbɛktɔl/（初めが阻＋阻）（スベクトル）「メガネ」; gwa*llt* /gwałt/（終りが阻＋阻）（グワスト）「髪」）; ferm /fɛrm/（終りが鳴＋鳴）（フェルム）「農場」）。しかし鳴＋阻（例えば/lp-/,/nt-/）で始まったり、阻＋鳴（例えば/-pl/,/-br/, /-tr/, /-vr/）で終わる音節は避けられる。

llyfr「本」のような語は、語末の<-fr>という綴りを見ると/-vr/と発音すると考えてしまうが、これは阻＋鳴という子音連続であり、これで音節が終わるのを避けるために、二つの子音の間に母音/i/を挿入して/'łəvir /（サビル）と二音節語として発音する。

ところが北部方言では、音節の終りで阻＋鳴という子音連続が可能であり、llyfr は/łɨvr/（シブル）と単音節語として発音される。南部方言の場合と<y>の

©日本カムリ学会 2008

発音が異なる点に注意したい。<y>の綴りは南部方言の llyfr の発音では/ə/を表すが、北部方言の発音では/ɨ/を表している。北部方言の発音では<y>は最終音節の母音を表すものとなってしまい、/ə/は最終音節に現れることが出来ないからである。現地カムリで llyfr という語が人によって「シブル」とか「サブル」とか発音されているのを聞くことがある。この違いは、音素配列規則の方言差によって説明することが出来るのである。

将来、英語を知らなくても使えるカムライグ語⇔日本語辞典の出版が求められる。そのような辞書では、個々の単語の発音記号を載せたいものである。その際に、カムライグ語音素配列論は重要になってくる。この意味でも、Awbery の研究は我々にとって非常に大きな意味を持っているのである。